



がん相談 ホットライン

2019年度 年報



公益財団法人

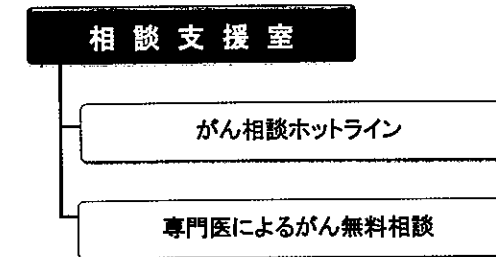
日本対がん協会

がん相談ホットライン 2019 年度 年報 目次

■ 相談支援室	1
1. 電話相談 (がん相談ホットライン)	
(1) 相談体制	1
(2) 相談実績	2
相談件数	2
相談者の性別	3
相談者の年代	3
相談者の続柄	4
相談の疾患部位	4
相談者の居住地	5
相談時間	5
相談の内容	6
COVID-19 (新型コロナウイルス感染症) の相談	8
ホットラインを知った媒体	8
(3) 相談実績から見てきたもの	9
(4) 今年度相談員が気になった相談	9
COVID-19 に関する相談	9
がんサバイバーの自分探し	10
末期の方の複数回利用	10
血液がんの相談	11
2. 広報活動	12
3. 相談者から頂いた感謝のことば	14
がん相談ホットラインの歩み	16
編集後記	17

■ 相談支援室

2006年4月にがん相談ホットラインを開設し、「ホットラインチーム」として活動を始めたが、業務拡大に伴い2009年に「相談支援室」と改称した。2017年度は組織の再編により、「専門医によるがん無料相談」を統合した。



1. 電話相談 (がん相談ホットライン)

がん相談ホットラインの理念

『日本対がん協会がん相談ホットラインは、相談者の言葉に耳を傾け、相談者が次の一歩を踏み出せるような支援を目指します。』

がん相談ホットラインの使命

- 相談者が困っていることは何かを一緒に考えます。
- 相談者の思いや考え、価値観などその人らしさを尊重します。
- 相談者にとって必要で、信頼できる情報を提供します。
- 相談者が問題解決できるための行動を具体的に提示します。

ホットラインの理念・使命に基づき、相談者の立場や年齢、おかれている状況により起こりやすい問題や心理面に違いがあることに留意し、相談者の問題や不安の軽減に繋がるような支援を心がけている。まずは相談者の話を十分に傾聴し、得られた内容からアセスメントする。そのうえで必要な情報の提供や、心理的なサポートを行うなど適切な対応をする。

(1) 相談体制

相談受付時間は、祝日、年末年始を除く毎日、午前10時から午後6時までである。予約は不要で、相談者・相談員共に匿名で相談を行い、看護師と社会福祉士が相談に応じている。

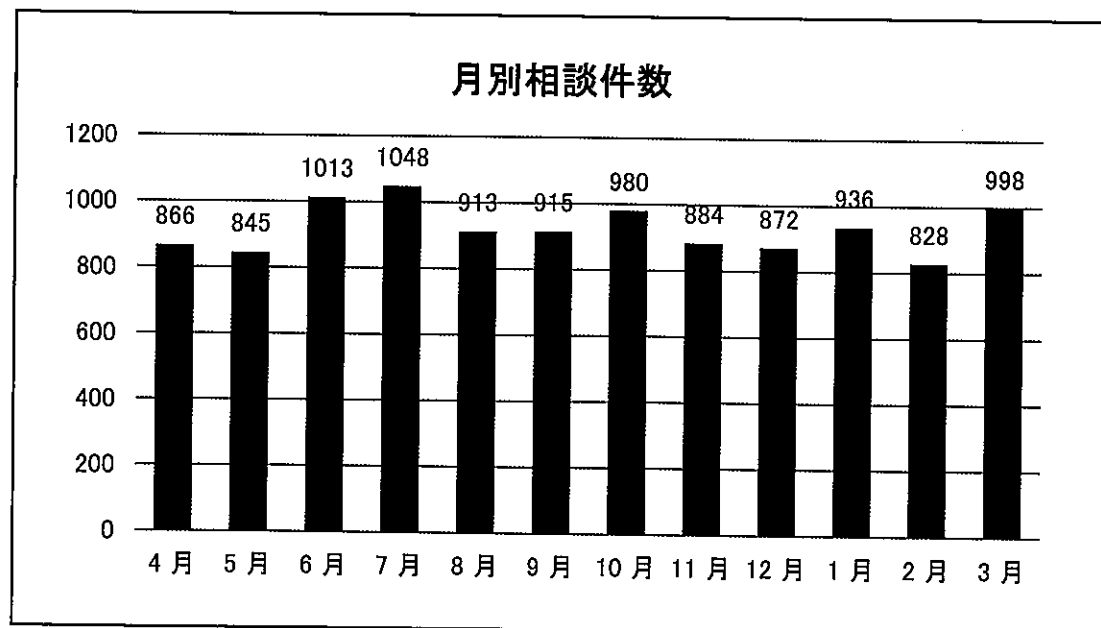
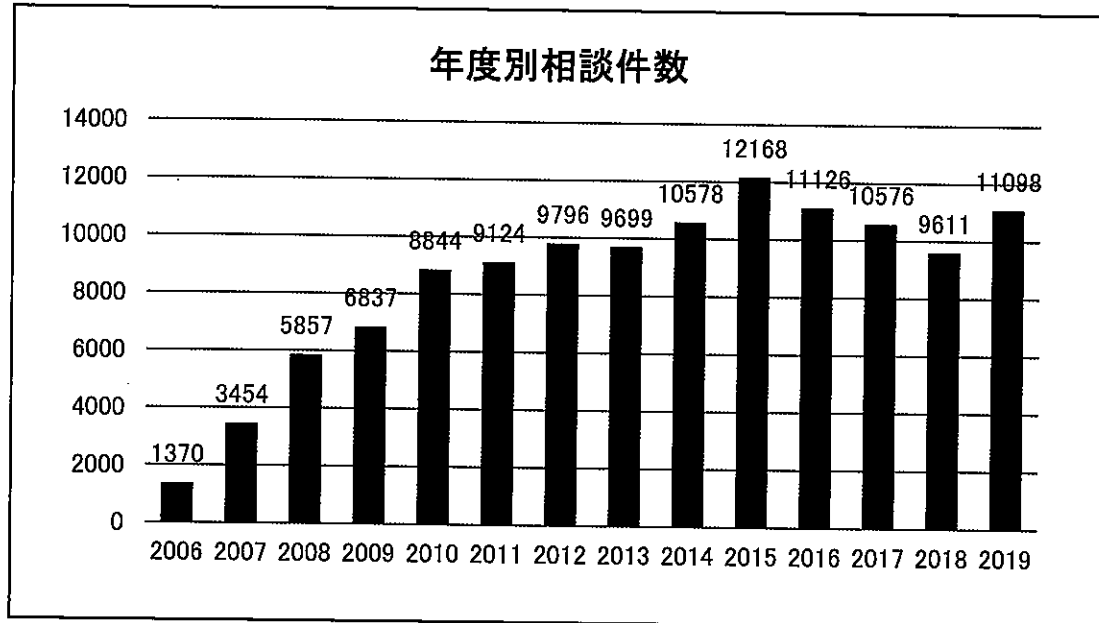
相談の質の維持・向上のため、継続的な研修や外部講師を招いた講習会の実施、外部研修への参加などを行っている。また、新任者には、独自の研修プログラムを実施し、相談員としての基本的なスキルを身につけている。

※新型コロナウイルス感染防止のため、現在は相談受付時間を縮小している(午前10時から午後1時、午後3時から午後6時)。状況に応じて通常通り再開する予定。

(2) 相談実績

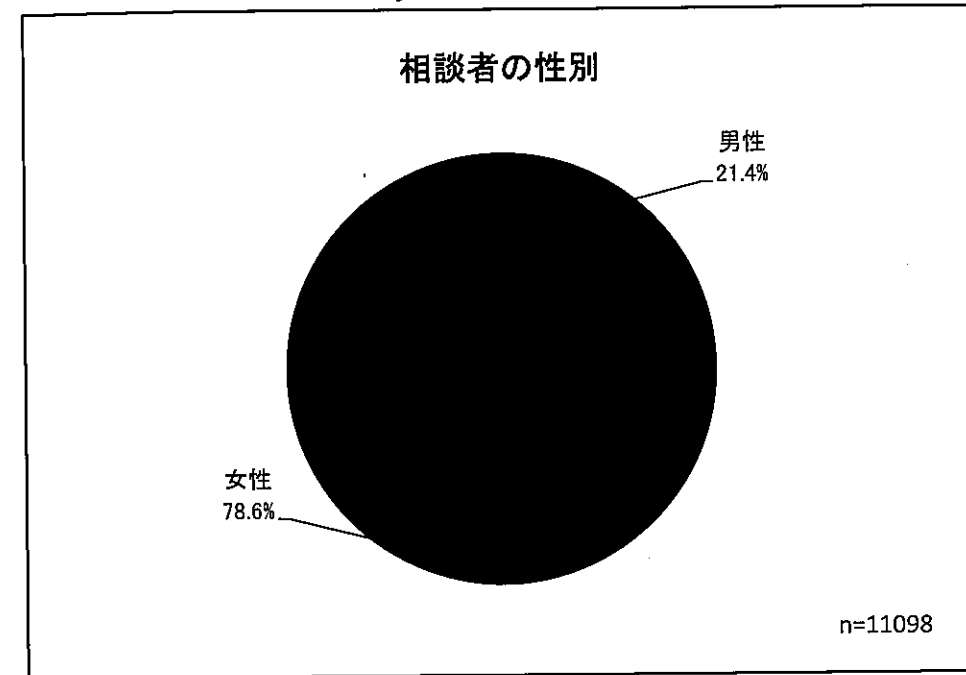
相談件数

2019年度の相談件数は11,098件、月平均件数は925件、前年度比115.5%だった。



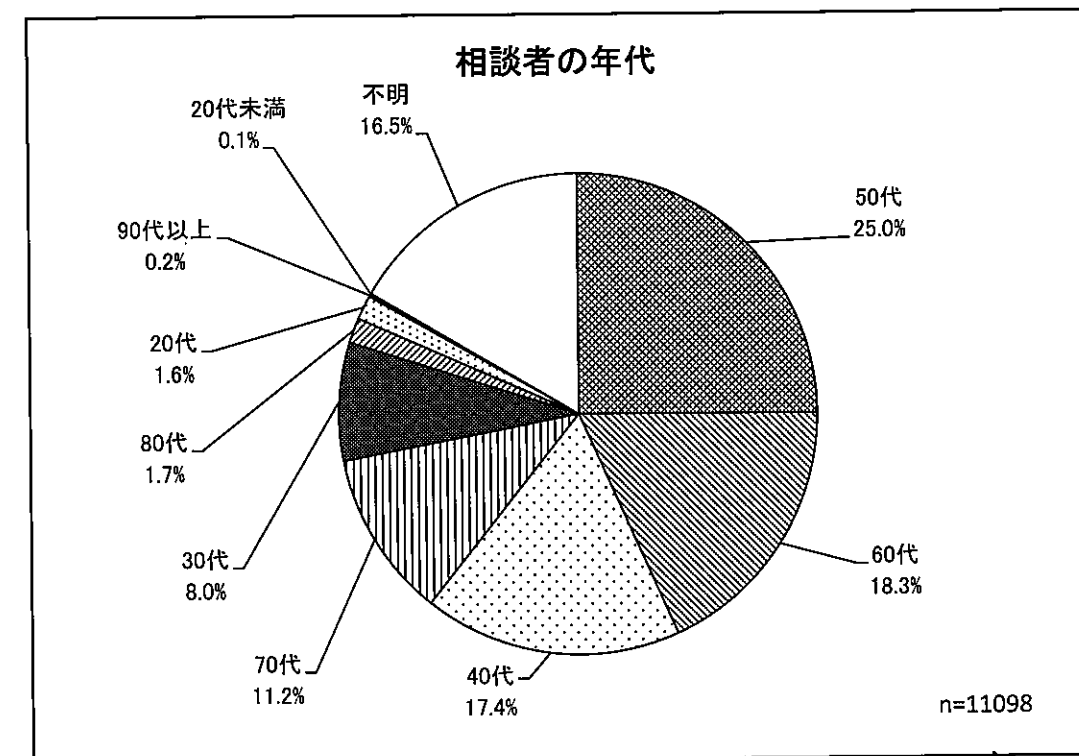
相談者の性別

相談者の性別は、女性が78.6% (8,722件)、男性が21.4% (2,375件)と例年と変わらず女性が多い。不明は1件。



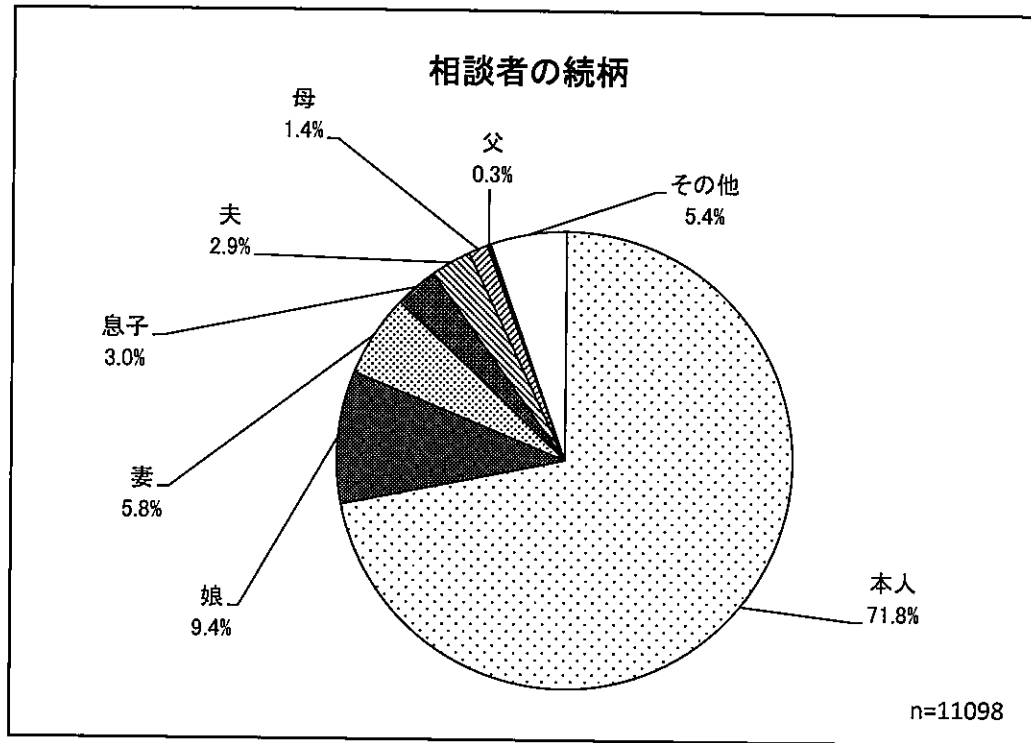
相談者の年代

相談者の年代は、50代25.0% (2,775件)、次いで60代18.3% (2,031件)、40代17.4% (1,934件)、70代11.2% (1,247件)と続く。



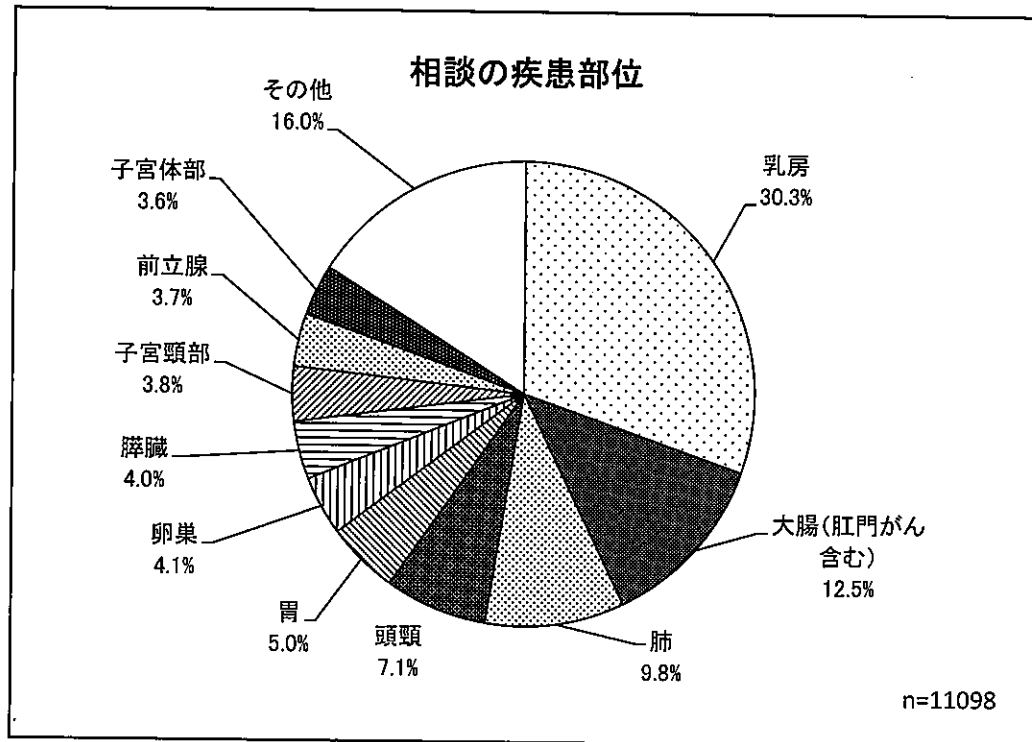
相談者の続柄

相談者の続柄は、患者本人が 71.8% (7,970 件)、次いで娘 9.4% (1,039 件)、妻 5.8% (648 件) と続き、例年この傾向は変わらない。



相談の疾患部位

相談の疾患部位は、乳房 30.3% (3,368 件)、大腸 12.5% (1,382 件)、肺 9.8% (1,085 件) と罹患数の多いがんが上位である。



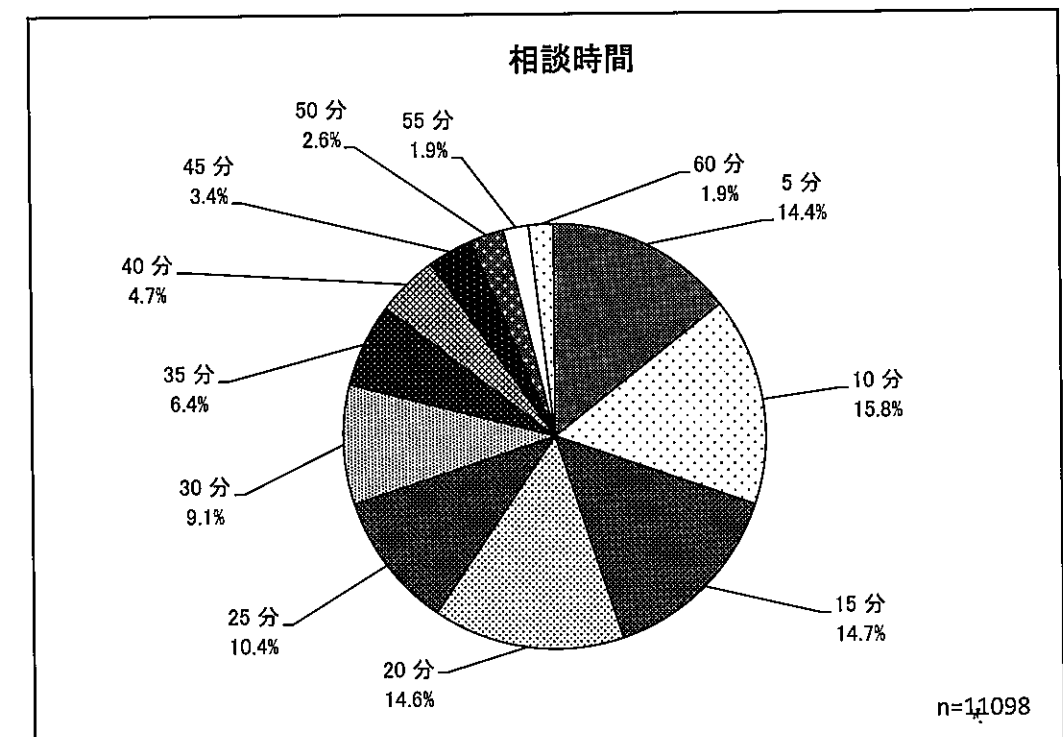
相談者の居住地

匿名で個人を特定できない相談であるため、相談者に了承を得られた場合にのみ居住地(都道府県)を聞き集計している。相談は全国および海外(8カ国以上)から寄せられ、前年度同様、人口とがん診療連携拠点病院が多い地域が相談件数上位を占めている。特に、首都圏からの相談が多かった。

都道府県	相談件数	都道府県	相談件数	都道府県	相談件数	都道府県	相談件数
東京都	2312	福岡県	199	長野県	76	秋田県	35
神奈川県	926	山口県	186	岩手県	72	香川県	34
埼玉県	712	静岡県	164	滋賀県	69	山梨県	32
千葉県	678	宮城県	163	奈良県	60	福井県	30
大阪府	652	群馬県	154	熊本県	57	山形県	27
長崎県	571	広島県	139	沖縄県	55	和歌山県	24
愛知県	350	京都府	135	石川県	50	徳島県	24
兵庫県	315	鹿児島県	120	福島県	46	宮崎県	23
茨城県	278	三重県	88	青森県	43	鳥取県	18
北海道	269	栃木県	84	島根県	41	佐賀県	10
新潟県	260	岡山県	82	愛媛県	40	高知県	9
岐阜県	220	富山県	81	大分県	38	その他	17
						不明	1030
						合計	11098

相談時間

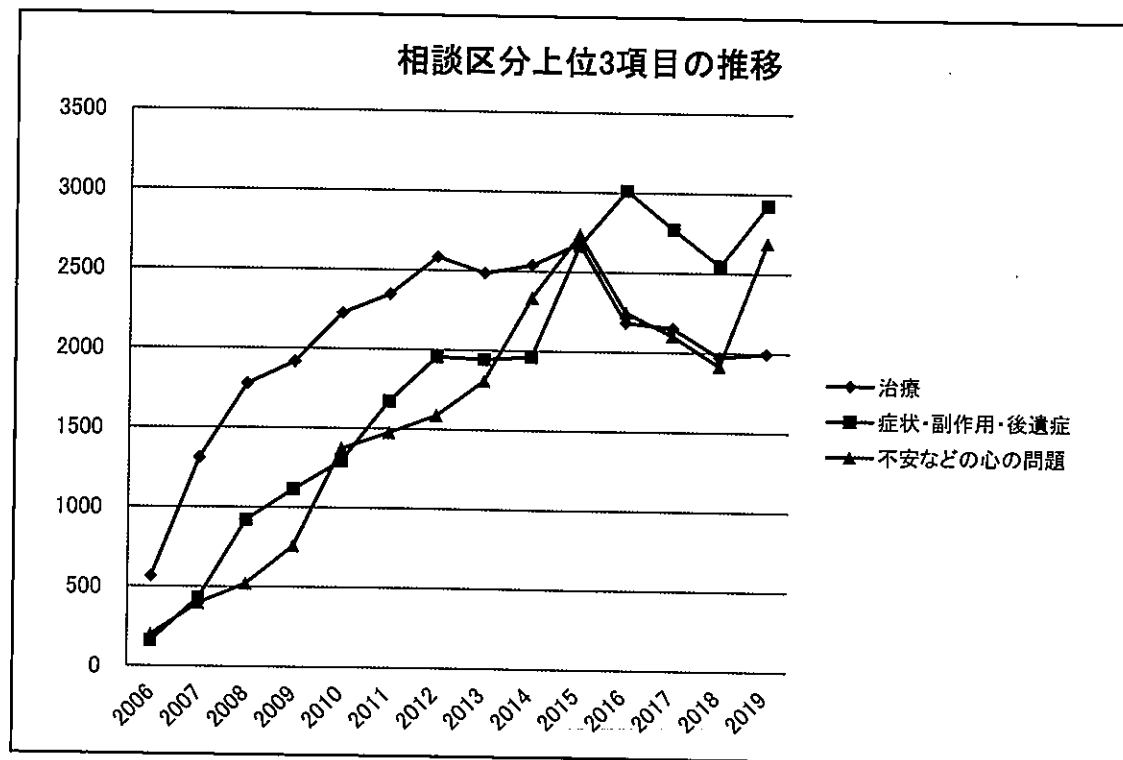
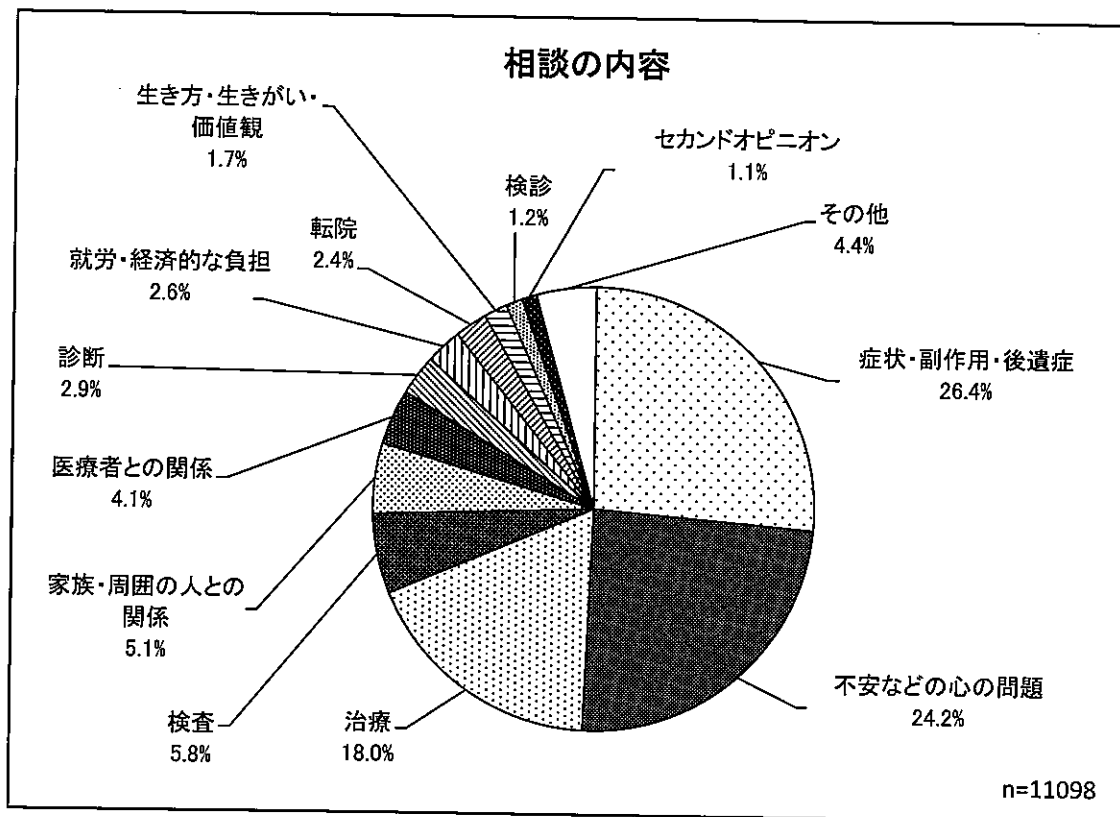
一回の相談時間は概ね 20 分と広報しているが、相談内容によっては 20 分では対応が難しいこともある。なかには 60 分以上に及ぶ相談もある。20 分以下の相談が 59.6% (6,609 件)、25 分以上の相談が 40.4% (4,489 件) だった。



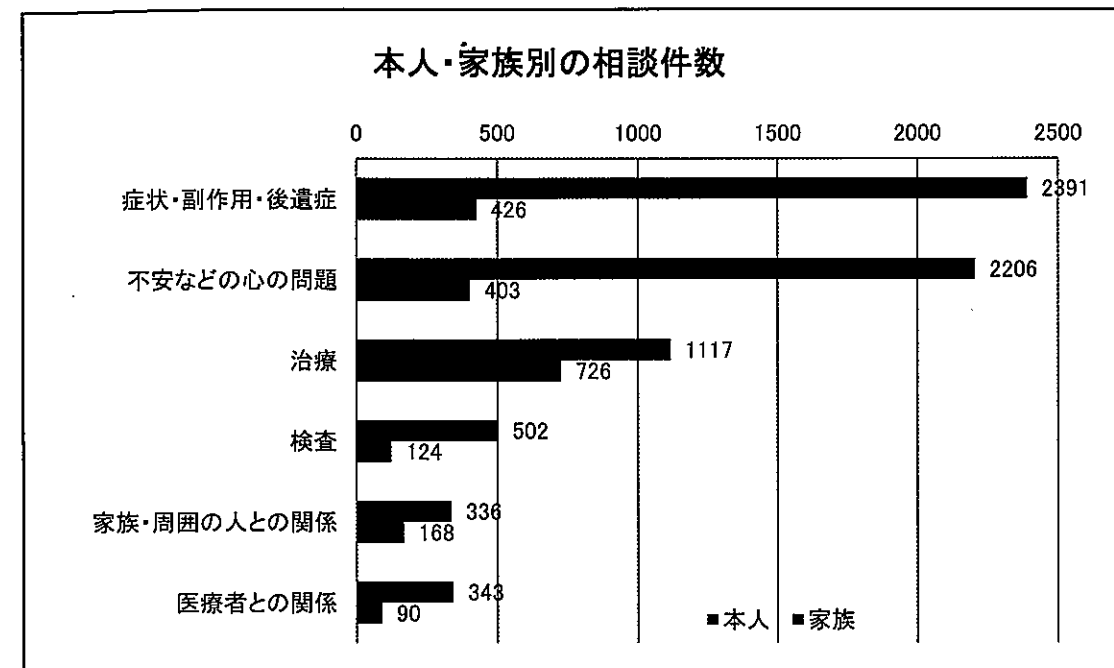
相談の内容

相談の内容は、「症状・副作用・後遺症」が26.4% (2,928件)と最も多く、次いで「不安などの心の問題」に関する相談が24.2% (2,691件)、「治療」18.0% (1,997件)と続く。

1つの相談に複数の問題が絡んでいる場合が多く、相談内容は第一項目から第三項目まで集計できるようにしている。ここでは第一項目のみを集計した。

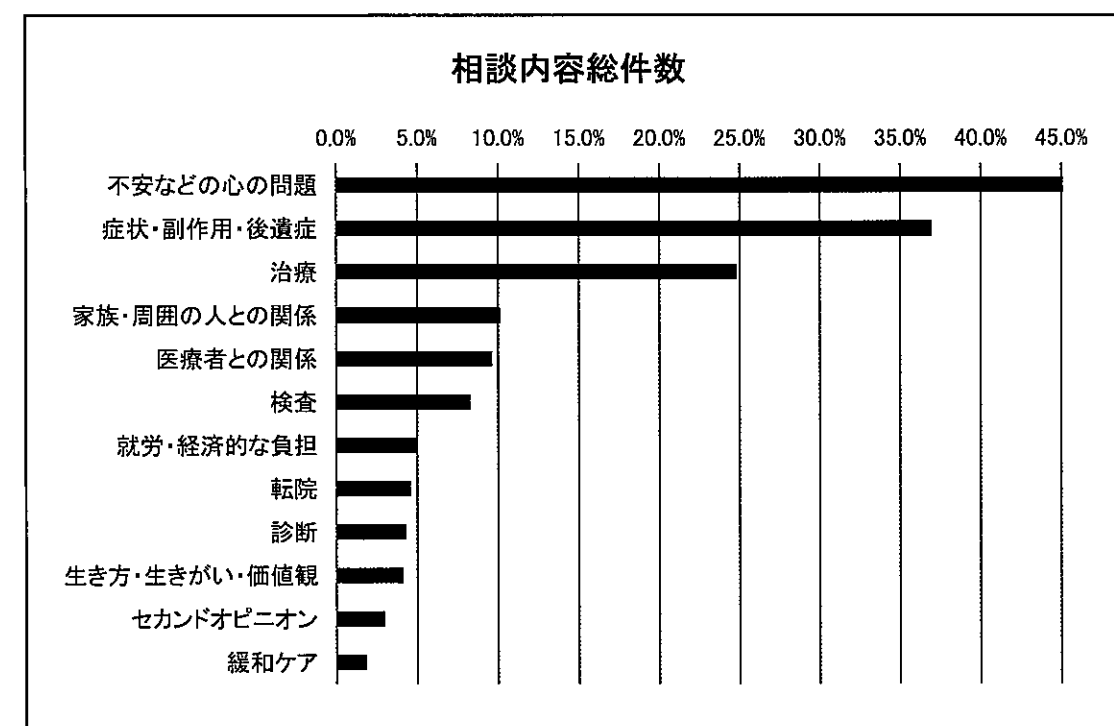


本人と家族では、相談内容に違いがあり、前年度同様、本人からの相談は「症状・副作用・後遺症」が最も多く、家族からの相談は「治療」が多かった。



※家族は妻、夫、娘、息子、母、父
※全体の相談件数の上位6番目まで

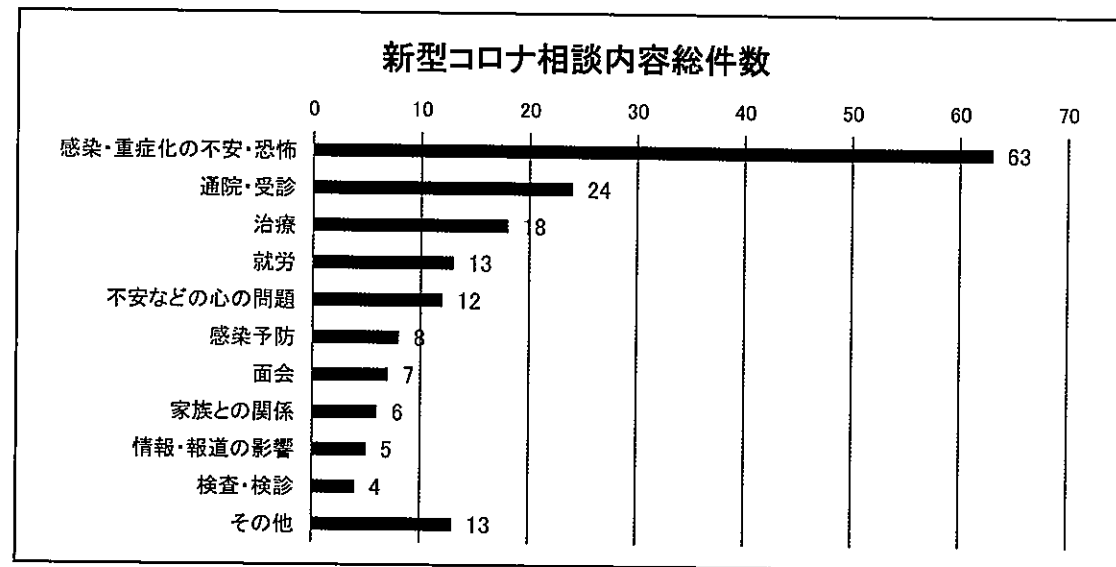
相談内容の項目（第一項目から第三項目まで）をすべて集計すると、第一項目のみの集計では二位だった「不安などの心の問題」が最も多かった。次いで、「症状・副作用・後遺症」、「治療」と続く。



COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の相談

国内で初めて新型コロナウイルスの感染者が確認されたのが1月16日。ホットラインに初めて相談が寄せられたのは1月20日で、以降、相談件数が徐々に増加していった。相談内容は、「感染・重症化の不安・恐怖」が最も多く、次いで「通院・受診」、「治療」に関する相談と続く。相談者は、治療中の方が最も多く、次いで経過観察中の方、診断・治療選択と続く。

※データは2020年1月～3月。1つの相談に複数の相談が絡んでいる場合が多く、相談内容は第一項目から第三項目まで集計できるようにしている。ここでは第一項目から第三項目のすべてを集計した。



ホットラインを知った媒体

初回相談者がホットラインを知った媒体は、インターネット57.4%（3,389件）が最も多く、前年度から9.6ポイント増加した。次いで、リーフレット15.2%（895件）、新聞5.1%（304件）の順が多い。そのほか、病院からの紹介や、友人・知人、家族・親戚、患者会といったいわゆる口コミもある。

ホットラインを知った媒体	件数（割合）
インターネット	3,389 (57.4%)
リーフレット	895 (15.2%)
新聞	304 (5.1%)
雑誌	113 (1.9%)
書籍	101 (1.7%)
保険会社	104 (1.8%)
病院(相談室・職員など)	58 (1.0%)
友人・知人	92 (1.6%)

ホットラインを知った媒体	件数（割合）
対がん協会	41 (0.7%)
家族	53 (0.9%)
相談機関(病院を含まず)	37 (0.6%)
地方自治体	28 (0.5%)
患者会	10 (0.2%)
TV	13 (0.2%)
その他	79 (1.3%)
不明	589 (10.0%)
合計	5,906 (100.0%)

* 複数回利用者は除く

※自己申告ではあるが、二度目以上の利用の方は46.8%（5,192件）だった。

(3) 相談実績から見てきたもの

相談件数は11,098件（前年度比1,487件増）で大幅に増加した。

月別の相談件数で7月が最も多く、次いで6月が多かった。

相談実績の傾向は例年と大きな変化はなく、依然として患者や家族の不安や悩みは多く、その悩みも多様であることがうかがえる。

主たる相談の内容で集計した「相談の内容」は、「症状・副作用・後遺症」が最も多かったのに対して、「相談内容総件数」では「不安などの心の問題」が最も多く、どの相談にも根底には不安があるといえる。

本人と家族の相談内容の比較では、順位に違いはあるものの「症状・副作用・後遺症」「治療」「不安などの心の問題」の相談が上位3位までを占めることは共通している。それは、主たる相談の内容で集計した「相談の内容」と「相談内容総件数」にも反映されている。

ホットラインの利用が二度目以上の方が前年度から7.4ポイント（1,407件）増え、総件数を引き上げた要因の一つになっている。利用の仕方は様々で、P10に記載したように末期の方が繰り返し利用する場合もあれば、がんの疑いが生じた時、診断された時、治療選択の時など様々な局面毎に利用する方もいる。また、親ががんになった時に利用していた人が、今度は自分ががんになり利用するというケースやその逆もある。

(4) 今年度相談員が気になった相談

COVID-19に関する相談

がん患者の多くは、日頃から感染に気をつけた生活をしている。特に化学療法中の方は、副作用の骨髄抑制があると、外敵から身を守る機能が低下するため、感染予防を徹底している。そうしたなか、COVID-19（以下新型コロナウイルス）の感染が拡大し、多くの患者が命を脅かされていると感じるほどの不安や恐怖にさいなまれることになった。

国内で感染者が確認された1月から、新型コロナウイルスに関する相談が寄せられ始めたが、「毎日テレビで流されている情報が日に日にひどくなってきて恐怖を感じる」「どんな事に留意して生活したらいいのか」「どうすれば感染しないか」という声が寄せられ、『得体の知れない物への恐怖』という表現がしつくりくるような様子であった。

次第に、「自分は重症化するか」「病院に行くのが不安。通院しても大丈夫か」「職場復帰を考えていたが、通勤を考えるとどうするか迷う」といった、自身に関わる具体的な相談が増えていったが、いずれの相談にも共通していたのは「感染の不安や恐怖」であった。

さらに、「コロナの影響で治療が延期になった」「自分で希望して延期した」「面会ができない」という声も聞こえ始め、感染の終息が見通せないなか、がん患者を取り巻く状況がより深刻になっていることがみてとれた。

患者・家族の不安や恐怖心が大きくなるなか、新型コロナウイルスに関する情報が少

なく(現在は各学会等が情報を発信している)、相談員にとって対応の難しさがあつた。しかし、厚生労働省からの情報や信頼のおける最新情報を相談員で共有し、正しい情報を伝えて不安の軽減に努めた。また、治療や検査に関わることは担当医に相談してよいことや、相談の仕方など助言し、自己判断で治療や経過観察を中断しないよう、冷静さを取り戻してもらえよう気持ちに寄り添いながら丁寧に話をした。

しばらくはこの状況が続く事が予想されるが、ホットラインとして、引き続き患者・家族の不安の軽減に努めたい。

がんサバイバーの自分探し

近年、「がんと共に生きる」という言葉を目にする機会が増えた。がんと診断されても死に直結するとは限らず、治療によって治癒したり、長く生きられるようになったりと、医療面は変化している。がんになっても生きる時代になりつつあるのだ。

それに伴い、がんになった自分とどう向き合い、どう付き合っていくのかという悩みや戸惑いを抱える人が増えているように日々の相談から感じる。

がんになって、「何もできなくて情けない」「どうしてがんになったのか」「なぜ自分ばかりこんな思いをしなくてはいけないのか」「こんな自分なら生きていたくない」など、これまでのようにできなくなったことを嘆く人や、今の自分を肯定できなくなる人は多い。

一方で、『命には限りがある』ということを実感し、命と向き合う体験をしたことで、「なぜ生まれてきたのか」「何のために生きているのか」「生きる意味は」と、幾度となく問いを繰り返し、命の尊さや人生のかけがえのなさ、家族や友人や仕事など周囲との関わりがあることのありがたさに気づく人もいる。プラスの面に目が行くようになると、少しずつ心が穏やかに変化していくこともある。価値観や考え方が変わり、周囲への感謝の気持ちが生まれたり、新たな生きがいや目標を見つけたりして、今の自分を肯定的に捉えて生きていけるようになる人も少なくない。

ただ、こう思えるようになるのは簡単ではなかったし、時間がかかったと話す人は多い。ホットラインでは、今の自分を肯定できず、どう生きていけばいいか悩み苦しんでいる人に対して、その苦しさや辛さにじっくり耳を傾けている。相談者が語るエピソードやマイナスに捉えていることの中にも、プラスのことが隠れている場合があるため、それに気づき、いまの自分を認められるきっかけを掴めるよう支援している。

末期の方の複数回利用

相談件数は多くないが、毎年、「自分の余命は残り少ないかもしれない」と言っ、複数回ホットラインを利用する人がいる。そこで語られることは、これまでの治療の経過や大変さはもちろんだが、「死の恐怖や生きるということを改めて考えた」「症状がありながらも日常生活が送れていることに感謝している」「人生を振り返ると、幸せだったと思う」など、未来への不安や人生の回想だ。

加えて、家族や友人など周囲の人の話、読んだ本や観たテレビの感想、今日はこんな

ことをしたい、またはしたという予定や報告など、相談というより、雑談のようなとりとめのない話も多い。相談員に話しながら、「この生き方でいいんだよね」と、自分と対話したり、言い聞かせたりして、誰かとつながることで、今、自分が生きているということを確かめているようにも感じる。

呼吸状態が悪く酸素吸入をしていても、「こうして誰かと話していると息苦しさを感ぜない」とか、「誰かの声を聴くと安心する」という声から、話すことは『心を放すこと』や『自分を癒すこと』になっていると思われる。一通り話して、「また頑張ります」と少し明るい声になって電話を切る人もいて、相談員との対話を通して、生きる力を得ていると考えられる。

ホットラインでは、この人生の回想や一見とりとめのない対話が、末期の患者にとって、とても大事な意味合いを持つのではないかと考え、少しでも相談者の気持ちに寄り添えるよう傾聴している。

血液がんの相談

血液がんの場合、抗がん剤治療がメインになることが多いため、「きつい治療をやり遂げられるだろうか」「どんな副作用が出るのだろうか」と不安や恐怖心が先に立ち、治療をすることに覚悟がいるようだ。

また、治療期間は長期にわたり、さらに治療後も合併症対策が必要な場合があるので、家族の支援・協力が欠かせない。寛解しても再発への不安がつきまとい、明確なゴールが見えにくいと言う人もいて、気の抜けない状況が続く。本人も家族も次第に心が疲弊し、気持ちに余裕がなくなるため、「本心とは裏腹に、ついぶつかりあってしまい、心を痛めている」と話す。はじめは話しにくそうにしているも、相談者の言葉に耳を傾けているうちに、徐々に気持ちがほぐれて本音を吐露することがある。

他にも、病気との付き合いが長くなると、周囲は日常に戻り、患者は取り残されたような孤独感を抱え、孤軍奮闘しているような気持ちになりやすい。そういう人も対話するうちに、家族や身近な人、医療者が自分を支えてくれていることに気づき、「一人で頑張っているつもりだったけど、そうではなかった」と、沈んでいた声に張りが戻ったように聞こえることもある。

このマラソンの伴走者のような存在がいることが、相談者の力になっていると思われ、ホットラインも伴走者の一人でありたいと思いながら支援している。

※2012年9月から、がん対策推進企業アクション(旧 がん検診企業アクション)からの協力要請を受け、推進パートナー企業・団体の社員・職員及び家族からの相談にも応じている。

2. 広報活動

(1) 印刷物

リーフレットは、例年と同様に全国のがん診療連携拠点病院、緩和ケア病棟を有する病院、都道府県のがん対策の担当部署や認定看護師の教育機関、看護・福祉系の大学、依頼のあった関係機関へ送付した。

また、当協会が主催しているリレー・フォー・ライフ・ジャパンの会場や市民公開講座などでリーフレットを設置した。

ポスターは、主に調剤薬局と依頼があった医療機関に送付した。

自治体から、広報誌やホームページにホットラインの情報を掲載したいという依頼を受けることや、がん関連の書籍や雑誌等でホットラインの情報が掲載されることも多くなり、社会資源の一つとして活用される機会が増えている。

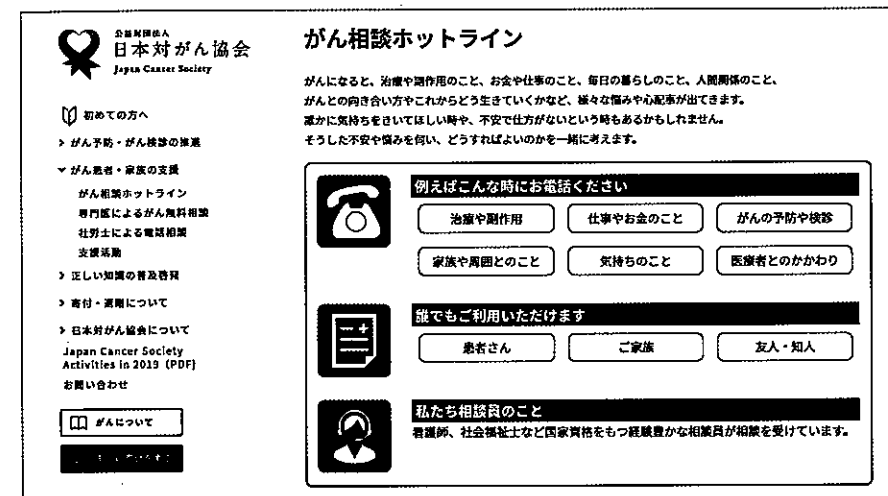
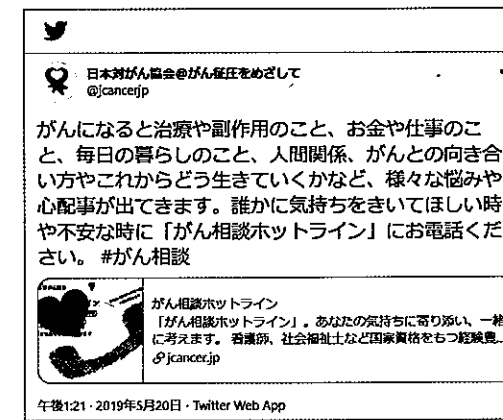
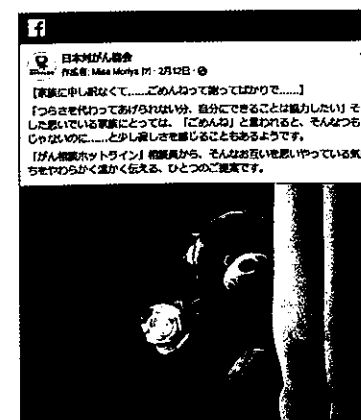
※リーフレットとポスターは当協会ホームページからダウンロード可



(2) WEB 関連

スマートフォンの普及に伴い、インターネットや SNS を活用した広報も行い、様々な方法でホットラインを知ってもらおう取り組みを行っている。

ホームページ : <https://www.jcancer.jp/>
 Facebook : <https://www.facebook.com/JapanCancerSociety/>
 Twitter : <https://twitter.com/jcancerjp>



(3) その他

取材対応

- 2019年9月14日 長野朝日放送 ハートフルメッセージ「リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2019 信州長野」
- 2019年10月25日 AERAdot. 「現役皮膚科医がつづる “患者さんと一緒に考えたいこと、伝えたいこと”」配信
上記は相談員 北見知美が対応

講演・トークセッションなど

- 2019年7月24日 「武田薬品工業株式会社 2019年度企業市民活動講演会」にて講演
- 2019年11月8日 「一般社団法人シニアライフよろず相談室 がんについての理解を深めよう がん相談ホットラインの患者・家族支援」を講演
- 2019年9月14日 abn 信州がんプロジェクトのトークセッション「リレーフォーライフって何だ!？」に出演(リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2019 信州長野)
- 2019年12月5日 「ピンクリボンフェスティバル 2019 活動報告会」にて講演
- 2020年2月24日 「2020年度リレー・フォー・ライフ・ジャパン キックオフミーティング」にてホットラインの紹介
上記は相談員 北見知美が対応

3. 相談者から頂いた感謝のことば

今年度受けた 11,098 件の相談のなかで頂いた感謝のことばや、前向きな気持ちを取り戻されたことばの一部を下記に紹介する。

◆診断前の方からの言葉

がんの疑いが濃厚で不安が強い方

自分は身寄りのない一人暮らしのため、相談する人がいない。これからもホットラインに電話をして良いと言われて、とても安心しました。励まされると、頑張ろうと思うんです。

◆治療前の方からの言葉

診断されて間もない方

診断されて数日、これからの治療のための準備で忙しくしていたが、一人になったら急に不安でいてもたってもいられなくなって電話しました。ホットラインで話す前と、話した後では、気持ちの状態が違っていることに気づきました。今はとても楽です。

◆治療中の方からの言葉

再発治療中で、これからの治療や仕事のことを決めかねている方

治療のこと、仕事のことなど、周囲の意見と自分の考えが違うことに自信が持てず、心が揺れます。ホットラインで話してスッキリしました。これまでの人生の転機は、いつも自分で納得して決めてきたことを思い出しました。自分で整理ができたし、自信も持てました。

維持療法を継続するかどうか悩む方

副作用で治療を続けるのが辛くなってきたが、治療をやめるのも怖く、どうしていいか分からなくなりました。ホットラインには初めて相談したが、混乱した自分の話を整理してもらって色々な事に気づけたし、落ち着くことができました。

治療効果が薄れてきた不安をきっかけに、がんになってからの人生を振り返った方
がんがわかってから、がんによって支配されていました。健康な友人に対して羨ましい気持ちが強く、会うのを避け、家に引きこもって病気の事ばかり考えていたことに、今気づきました。自分のために何ができるか、改めて考えてみます。

◆治療後の方からの言葉

親戚づきあいに悩む方

がんと向き合うことに精一杯で、周囲との付き合いが煩わしく感じる自分が薄情なのはと悩んでいました。これまでいろいろなところに何度も相談したが、響くものを得られず辛かったです。今日は納得がいくヒントを貰えて、やっと希望が持てました。

がんになってから気持ちを強く持てずに悩む方

がんになったことだけでなく、経済的な悩みも重なり、メンタルが弱くなっていると感じます。以前はこんなことはなかった。今回、主治医から勧められてホットラインを利用しました。こんな気持ちになるのは自分だけではないと言ってもらえてほっとしました。話を聞いてもらい楽になりました。

◆家族からの言葉

治療に参加しようとする夫を心配する方

夫の考えを想像するよう促され、いろいろ話しているうちに、本人の考えを尊重しようと思えるようになりました。

家族を看取ったばかりの方

最期の時を思い出すと、自分のかかわりが原因で早く亡くなったのではと思い悩んでいました。この1週間とても苦しかったけど、自分のせいではないとわかってほっとしました。話を聞いてもらえて、色々教えてもらって救われました。ありがとう。

転移治療の説明を聞いて混乱する方

家族ががんの手術後、転移があることがわかり、内科で治療の説明を聞いたが、厳しい内容に動揺し、標準治療以外でもいい治療がないかと相談しました。医師の言葉に混乱し、どうしたらよいかわからなくなっていたが、これからはなくてはならないことや、できることが見えてきました。

家族が余命宣告されて混乱している方

本人は思ったより冷静だが、周囲に迷惑をかけるといい、こうしてほしいと家族が思うことを遠慮している。遠慮してほしいと思わないのは自分のエゴだろうかと思って、なにも手がつかないほど悩んでいた。ホットラインで、色々な想いの伝え方を一緒に考えてもらって、気持ちが楽になりました。

ーがん相談ホットラインの歩みー

2006年4月18日、「がん相談ホットライン」はスタートしました。それまで当協会の相談窓口は医師による電話相談・面接相談のみで、そこに寄せられる相談は主に治療に関するものでした。しかし、経済的な心配、退院後の生活の不安、就労に関する問題など、医師の相談ではカバーしきれない相談が目立つようになり看護師と社会福祉士による電話相談、「がん相談ホットライン」を設けました。

がんに関する疑問や心配、不安を抱えた時に患者本人だけでなく家族などなたからでも、そして全国どこからでもご相談をお受けできるような相談窓口を目指し、日々相談者の声に耳を傾けています。

がん相談ホットラインの歩み		がん対策の歩み	
1962年			国立がんセンター設置
1964年			がん対策小委員会決議「がん対策の5本柱」
1981年			がんが日本人の死因第一位となる
1983年			胃がん・子宮がん検診の開始
2001年			地域がん診療拠点病院整備指針策定
2004年			第3次対がん10か年総合戦略開始
2006年	4月	がん相談ホットライン開設 1回線で相談受付は火曜から金曜、13:30から16:30	6月 がん対策基本法案成立
	6月	2回線に増設	10月 「がん情報サービス」新規公開 国立がんセンター中央病院、東病院に相談支援センターを開設
2007年	4月	事務所移転	4月 がん対策基本法施行
	5月	3回線に増設 相談受付を月曜から金曜に拡大	6月 がん対策推進基本計画 策定
	10月	企業向け啓発活動開始	11月 相談支援センター相談員基礎研修 地域がん診療拠点病院 指定開始
2008年	2月	当協会ホームページに「よくある質問集」を制作	
	3月	株式会社資生堂と共同でがん体験者のための美容セミナーを開始	
	4月	相談受付を10:00から16:00に拡大	
	6月	4回線に増設	

2009年	3月	「ホットラインチーム」から「相談支援室」に改称		がん対策推進企業アクション がん検診50%推進本部の設置
	4月	がん相談ホットライン3周年記念講演会 「安心して利用されるがんコールセンターであるために」を開催 西銀座分室へ移動		
2010年	1月	相談受付を月曜から土曜、10:00から18:00に拡大		
	10月	相談受付を月曜から日曜に拡大（祝日を除く毎日、10:00から18:00の現行の体制となる）		
2011年	4月	被災地専用フリーダイヤル開設 祝日、お盆を除く毎日、10:00から16:00まで実施（同年12月28日終了）	3月	東日本大震災
2012年	9月	がん検診企業アクション（現がん対策推進企業アクション）への協力	6月	第2期がん対策推進基本計画 策定
2013年				がん登録推進法成立
2014年				がん研究10か年総合戦略開始
2016年	4月	がん相談ホットライン開設10周年	1月	がん登録推進法施行
2017年	11月	事務所移転		

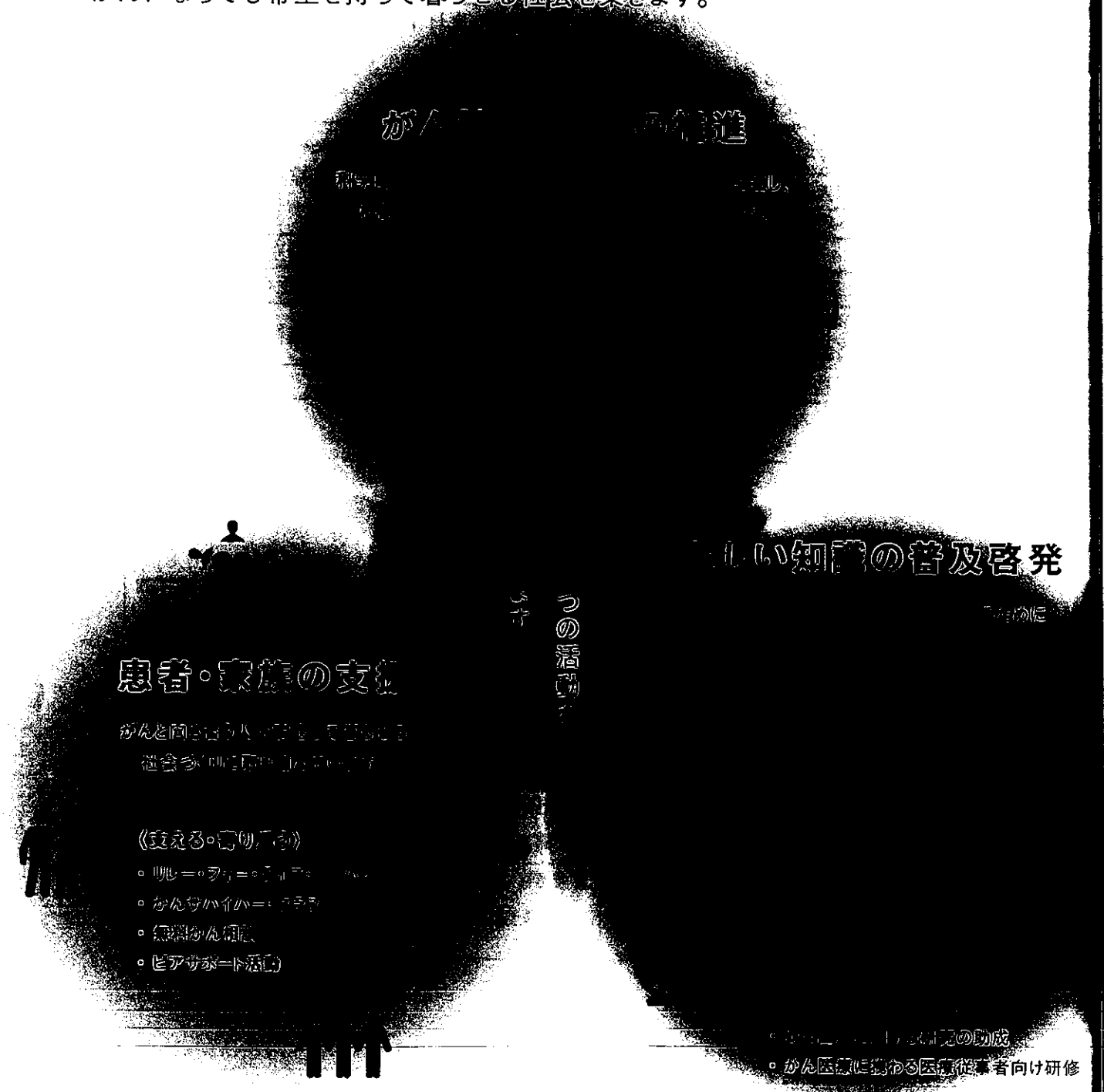
編集後記

2019年度もこれまで通り過ごしていけるものと思っておりましたが、年明けから始まったCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）により、短期間で世界中が大きく変わってしまいました。当然その影響はがん患者さんやご家族にも及び、不安と混乱が今も続いています。そんな中でも、「ホットラインは電話だから、感染の心配をせずに相談できる」という声が寄せられ、電話によるがん相談の意義を改めて痛感しました。

今後しばらくは大変な状況が続くと思いますが、引き続きホットラインは、がんで悩む方々に寄り添っていきたく、思いを新たにしています。

がんで苦しむ人や 悲しむ人をなくしたい。

日本対がん協会は、1958年から、
民間の立場でがん対策に取り組んできました。
幅広い活動を通じて、すべての人が手を携え、
がんになっても希望を持って暮らせる社会を築きます。



■公益財団法人日本対がん協会がん相談ホットライン相談員採用基準

- [資格] 看護師、社会福祉士、精神保健福祉士等の国家資格を有すること
- [経験] 5年以上の医療現場等の臨床経験があること、または、これに準ずる経験があること
- [研修] 当協会の研修カリキュラムを修了していること
- [インターン研修] 以上を満たした上で、当協会がん相談ホットラインにて10日間以上のインターン研修を受けること
- [認定] 以上の要件に該当し、相談員認定委員会の認定を受けた者を、相談員として採用する

■公益財団法人日本対がん協会がん相談ホットライン相談員認定委員会

- (2021年1月1日現在)
- ・委員長 岡本 宏之 (日本対がん協会事務局長)
 - ・委員 塀場 勝司 (日本対がん協会事務局次長)
 - ・委員 北見 知美 (日本対がん協会相談支援室マネージャー)

私たちの活動は、みなさまからのご寄付によって支えられています。

■ご寄付の振込先

<口座名> 公益財団法人日本対がん協会

ゆうちょ銀行 ※振込手数料は無料です

郵便振替口座 00180-1-5140

銀行 ※振込手数料がかかります

三井住友銀行 丸ノ内支店 (店番号245) 普通預金0518150

みずほ銀行 銀座支店 (店番号035) 普通預金1003855

三菱UFJ銀行 京橋支店 (店番号023) 普通預金1718240

■インターネットからのオンライン寄付

ご自宅のパソコンやスマートフォンからお手持ちのクレジットカードで寄付ができます。オンライン寄付は、毎月定額の自動引落しが可能な「継続寄付」(毎月の寄付)と任意の金額をいつでも寄付が可能な「一般寄付」(今回の寄付)がございます。

協会のホームページ <https://www.jcancer.jp/>

トップページ上部 **すぐに寄付をする** をクリックしてください。



2021年1月 作成・発行 公益財団法人日本対がん協会
〒104-0061 東京都中央区銀座7-16-12 G-7ビル9階
TEL 03-3541-4771 FAX 03-3541-4783

